氏名（本籍）	伊藤隆之（イトウタカユキ）（山形県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第 214 号
学位授与年月日	平成20年３月25日
学位論文等題目	〈作品〉Painting
	〈論文〉THE PERFECT WAY OF LIFE
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　准教授　（美術学部）　大西　博
（論文第１副査）	〃　〃　（〃）　佐藤道信
（作品第１副査）	〃　教授　（〃）　佐藤一郎
（副査）	〃　〃　（〃）　櫃田伸也
（〃）	〃　准教授　（〃）　小山穂太郎

（論文内容の要旨）

子供のころ、友達と遊んでいたときに、森の中で不法投棄されたテレビを発見した。私は、近くに落ちていた棒で、そのテレビのブラウン管を叩き割ってみたことがあった。普段、ドラマやバラエティー番組が映っているけれど、ブラウン管の中で何が起こっているのだろうと、つくづく気になっていたからである。しかしそこには、俳優が休憩している姿も、風景も見えるはずがなかった。

私たちは、写真やテレビ、絵画、あるいは実際目の前に映る光景などのあらゆるものに対して、物質感や形態感、空間をイメージしたり、そこに現実感をおぼえたりしている。

だからといって私は、目の前に映って見えるものごとが、「完璧」に現存しているものとは言い切れない、と感じている。この疑問から、私は論文で、仮想的に現実を体験することが、ものごとの現実とどう関係してくるのかを論じた。

第１章では、絵画から見出すイメージについて、私の体験をもとに考察した。絵画は平坦に近い画面であり、単なる絵具の形跡にすぎないが、そこから人物や風景、様々な事物をイメージしてしまうことに、興味をおぼえたからである。また、そのイメージするものが、人々の価値観によって、多様に変えられている現状を、ゴリラの描いた絵や、デュシャンの作品を例にあげて論じた。絵画における現実感を客観的に見つめ直す試みである。

第２章では、情報化社会における、情報の価値や意味と、それを実感するために必要な媒体との関係性について考察した。テレビや雑誌、インターネットの画像は、私たちにとって日常的に関わることの多い情報だが、物質あるいはものとは関係ないところで、その価値や意味が変化している状況がある。そして社会は、それを管理しているようで、処理しきれていない。そのような情報誌としての古雑誌や、テレビの画像を、私は絵画制作のために収集している。物質あるいはものとしての価値のあり方について考え、そこで生まれている価値の落差を確認するためである。

私たちがものごとを実感するということは、情報のとらえ方によって位置づけられ、その内容にかかわらず、それを現実と見なすか虚構と見なすかは、各自の判断基準に委ねられている。それは、自身の意識のあり方、個々の存在そのものにもかかわってくる大きな問題である。よって第３章では、現実と虚構を主題に、自己の存在と現実感との関係性について考察した。

私は、雑誌やテレビ、インターネットの画像は、物質的には紙のインク、あるいはモニター画面のガラス質からイメージしているにすぎない虚像と考えている。私は絵画によって、そうした画像から視覚

的にイメージしているものの虚構性を露呈しようと試みている。私にとっては、日常生活で直接関わって実感している事物の現実だけでなく、そうした虚像に、現実感を見出している事実もあるからだ。

私が制作のために使用しているのは、例えば時間を経ることで人々の記憶から薄れてしまうような出来事や、私自身が実際にその場所に行って見たり触れたりしていない、過去の風景や事物が映っている画像である。

つまり、画像を通して間接的にものごとを見ながら、現実に在るものとして、何の疑いもなく思い込んでしまっている情報を収集し、それを絵画に変換している。

私はその過程で、一般的な絵画表現である立体描写や質感表現などによって、対象を写実的に再現する方法をとらず、逆にその画像からイメージしてしまう具体的な質感や立体感を、できるだけ排除しようと試みている。他にも、そこから感じてしまうような時代性や歴史的背景、社会的な位置づけを排除し、写真や映像に見出してしまう現実性を排除することを試みている。そこでの状況設定を詳細に再現していけばいくほど、虚像に現実性を付与することにつながってしまい、仮想の領域をこえてしまうからである。

私は、写真や映像に映し出されたものを、虚像の情報として確認するため、距離を置いて関われるようなイメージに変換している。現実性を排除したうえで見えてくるイメージを、絵具の筆跡や色面、その物質的な表情といった、絵具による痕跡に置き換え、空虚なイメージに変換しようと試みている。対象から離れたイメージの空虚さに、自らのイメージを投影するためである。

第４章では、自分の作品解説を通して、その具体的な方法を論じた。

油絵具の点や線などの筆跡、その絵具の光沢感や凹凸の変化、あるいは偶然起こった絵具の物質的表情を、画面に残した状態に留めることで、私は未完の絵画を形成しようと試みている。絵画において感じる現実感とは、絵具の塗膜や、絵画の技法的な法則から、視覚的にイメージしている虚構（イリュージョン）であると感じるからである。また、その絵具の筆跡、点や色面から受け取るイメージが、自分自身の経験や、その日の感情によって変化して見えたり、元々の意味とはかけ離れた意味に変わって見えたりすることに、私はむしろ現実感をおぼえるのである。そして、私自身の身体的な行為を生々しく残すことができ、自分の生活のリズムに合わせ、常に設定し直せる状態を構築できるのが、私にとって油絵具であると考えている。

情報が氾濫する社会における、現実か虚構なのかよくわからない多種多様な情報のなかで、私たちは自己の存在を現実世界に位置づけるための基準を見失いかけている。私は、絵画との関わりを通して、私が私として生きている事実や、私自身の意識の存在を実感していこうと考えている。自分自身の存在を見失わないために、私は絵を描いているのかもしれない。